

THE  
REAL  
FACE

## 2001年のサウンド・オブ・トーキョー、ピチカート・ファイヴ

Les Pizzicato Five; The Sound of Tokyo, 2001



ポップで洒落たパッケージに包まれた  
クールでグルーヴィーなピチカート・ファイヴ  
—— 1993年のトーキョー ——  
を象徴する彼らについてこの夏知った二、三の事柄



# Pizzicato Five

テキスト—早川加奈子  
撮影—ハリー中西 (HARRY'S EYE)  
協力—報雅堂、日本コロムビア

80年代に入ると、YMO以降のテクノ・ムーブメントに影響を受けたアーティストが幾つも誕生した。そんな中、

ポストYMO時代のテクノ・ポップ・バンドとして細野晴臣のプロデュースのもと、ピチカート・ファイヴが誕生する。小西康陽、高浪敬太郎の2人を

中心とするピチカート・ファイヴは、初期のテクノ・ポップ色の濃いサウンドから次第に、膨大な音楽知識を感じさせる洋楽寄りのポップ・ミュージックをクリエイトするバンドとして、その音の幅を広げているグループである。

デビュー以来、佐々木麻美子、田島貴男と、ヴォーカリストが何度か変わったが、90年に元ポーターブル・ロックの野宮真貴が加入し、それ以降は最強(?)のコンビネーションをみせる現在に至る。結成当時から、その音のみならず、

彼らの映画やアートに対するセンスの良さは、ファッション関係者などからも注目を集めていたが、野宮真貴の加入を皮切りに、彼女をフィーチャーしたビジュアルを強力にアプロウチした

作品を大量生産。ピチカート「お洒落、イメージは今やすっかり定着したようだ。そんな彼女がこの夏いちばんピ

ースなアルバム「ボサ・ノヴァ2000」をリリースした。ボサ・ノヴァという夏らしいタイトル、しかもプロデュサーはこれまたお洒落な若者に大

ファイヴについてメンバーの小西康陽、野宮真貴が語る二、三の事柄。

**ピチカート・ファイヴ+小山田圭吾は、あんみつの上のクリームかもしれない**

ピチカート・ファイヴ(以下PV)として小山田圭吾、しかもタイトルがボサノヴァときたら、もう絶対食指ソ

小西「もちろん/大サービス」  
——もともと小山田君はPVのファンだったんですけど。  
野宮「オリジナル・ラヴの方が好きみたいよ(笑)」

小西「PVを好きな人ってフリッパーズ・ギターも好きだと思っし、フリッパーズのファンも何割かPVのファンの人もあるだろし。オリジナル・ラヴのファンだったりUFOのファンだったりするんだらうけど、ね、まさか一緒にやるとは思わなかったでしょ?」

——ええ。ケーキの上にアイスクリームが乗ってるような贅沢さですよ。ね。小西「あんみつの上にクリームが乗っかってるようなものかもしれない笑」

小西氏の語るようにPVとフリッパーズ・ギターのファンは実際何割か重複しているといえる。例えばハーバース・ピザールやバート・バカラック、その他諸々の影響を受けたアーティストが同じだったりという音楽的共通項、

りがその理由かもしれない。ちなみにオリジナル・ラヴも信藤氏のデザインを使用している(参考までに、オリジナル・ラヴの場合は、VOの田島貴男が一期PVにVOリストとして在籍し、3枚のアルバムを残しているということもあり、ファンが重複しているのは極当然。また、フリッパーズ・ギターは引年解散。現在小山田圭吾はプロデュース業を中心に活躍、小沢健二はソロアーティストとしてそれぞれに活動している。

**メイド・イン・TOKYO**  
野宮真貴が正式メンバーになってからというもの、PVは非常に沢山のレコードをリリースしている。今回のアルバムに至るまでにサントラ、シングル、ミニアルバム、ビデオ、アナログ盤も合わせると、10作品以上だ。

小西「常にすくすくいっばい出してきて、よ。中身よりも常に沢山出してきて、いうことになって面白いと思ってくるといいなと思っ」

野宮「色々アイデアもできてきて、色々やってみたいと思っっちゃうし、曲もどんどん書けるらしい」

小西「毎月出してこれっかっていわれたら出しますよ、本当に」  
野宮「月刊誌みたいに」  
実際PVの仕事量というのは感心してしまっほどである。そしてそれには、

タルで済まされない所有欲をかきたてられてしまっ秀れたオマケ。気が付くとつい全部揃えたくなくなってしまっている。今作「ボサ・ノヴァ2000」はカード、ステッカー入り。また7月1日に別ヴァージョン「スーヴニール2000」が完全限定発売されたがこれまた特殊パッケージ入り、という稀少価値商品。こうしたマニアックなまでに買わせてしまおうという戦略とは何だろう。

小西「僕達もね、ただ音楽やってるって感じじゃないんですよ。音楽を作りたくて作ってるって言うだけじゃなくて、パッケージとか野宮真貴さんの衣装とかドレスアップすることが、ラ

イヴでパフォーマンスすることとか、あるいは沢山レコードを出すというそういう行為すべてがPVの活動だと思ってるから。逆にいうと、ファンの人も沢山買ってるとか、沢山商品を持ってるとかね、集めるとか、そういうこと自体にPVを楽しむ喜びを見出だしてほしいっていうことなんですよ」

PVのCDや宣伝資料にはいつもトキーというキーワードが付けられている。そしてこのPVの仕事量と速度、その楽しみ方を考えると、情報が溢れる街「東京の姿が、PVのイメージに重なってくる。このサウンド・オブ・トキーPVにとっての東京とはどんなものなのだろう。

小西「極端な言い方をすると、どこの地方都市でもそれぞれの特長はあるけども、ある視点から見ると、みんな東京に似てますよね。それはレコード屋さんがあってファッションビルがあってとか



C

ato Five Les Pizzicato



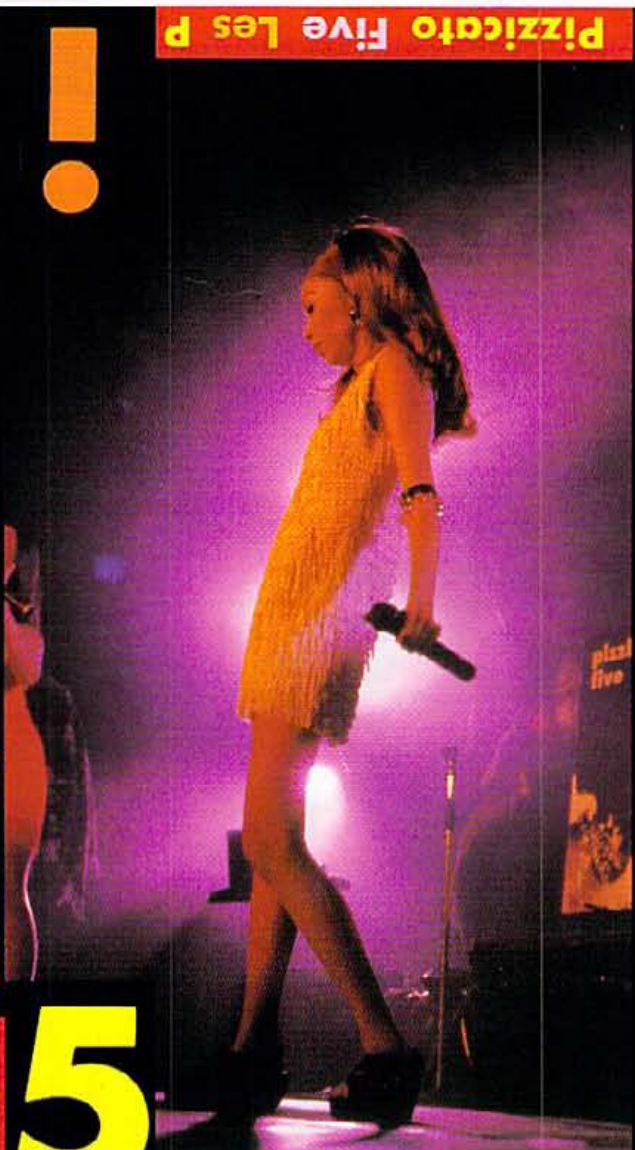
e Les Pizzicato

L



F

Pizzicato Five Les P



5

Les Pizzicato Five Les



P

izzicato Five Les Pizzicato Five Les Pi

d

っていう消費社会という部分での、東京のスムール版、いわゆるリトル・トリーキョーみたいなところありますよね。

僕なんか大阪や京都に来るのすごく好きで、それは美味しいものいっぱいあってレコード屋もあって…。人それぞれ色んな楽しみがあると思うんだけど、僕はお金を使うことがいっばん好きなんですよ。だから自分にとって東京は何かっていうとお金の使い手のある街なんです。例えば東京に住んでるのに、一年間どこにも行かない、レコードも買わない、洋服も買わない、外に食事にも行かないっていうんだったら東京に住んでる必要ないと思いませんか？僕にとって東京ってお金を使う喜びがある街。PVがサウンド・オブ・トリーキョーっていつてんのは、そういう東京なのね。外人から見てもそう。秋葉原があって六本木があって新宿があつてっていう」

そんな東京がPVの象徴とするなら



ばPVの象徴は野宮真貴その人である。コンボサーである小西、高浪尚氏がもつぱら彼女のわき役に徹することで、PVは成立している。それは、カネボウのCMソングでもあるシングル曲「スウィート・ソウル・レヴュー」のプロモーション・ビデオのワン・シーン——スタジオの中で白いドレスを着た野宮真貴が、床に敷き詰められたレコード・ジャケットの上を裸足で踊る——に象徴されているように思われるが…。

決まったんで、じゃそれをやってみようってことで。本の校正刷りは無理だけど、レコードのジャケットだったらさらにPVのファンにアピールするかなと思っただけです」

**ファンは皆ビッチカート・マニアである**

PVにはもう一つの楽しみ方がある。それは彼らの作品をマニアックに聴くという方法だ。旧譜を記憶しているからこそわかるマジックがあるため、マニアになればなるほど面白味が増してゆく。例えばリミックスを繰り返しながら何度も登場する同じフレーズ。

小西「曲を考えてメロディが出てくると、このメロディ・ラインでどこかで聴いたなっていうと…」

野宮「自分の曲(笑)」

小西「じゃ使おうっていうさ。だってそのメロディにはその言葉がいちばんハマリがいいからさ。昔その曲を知っ

てる人には知らない人とは同じには聴こえないでしょ？どうしてもあの曲を思い出しながらいちやうっていう。そういう効果はあると思う」

——やはりPVはPVの商品を沢山持っているからこそ楽しめる、とや

小西「そう、マニアになるほど面白くなる(笑)。大河小説のようなレコードを作る、サザエさんとか(笑)。わかる人にはわかるっていうね」

PVは毎月、ニューヨークで行われるニューミュージックセミナーへ2度目のライブ出演を果たす。そしてそのままニューヨークに滞在し、英語版のデモテープのレコーディングに入るという。もちろん海外リリースのためである。

関西方面でのライブは未定のPVだが、野宮真貴が某コンビニのCMに復帰(笑)出演中なので当面はそれを見て頂きたい。何しろコレもPVを楽しむためのネタのひとつかもしれないのだから。



※ボサ・ノヴァ・レヴュー・ビッチカート・ファンは、2,000円(税込)/日本コロムビア

TOWER RECORDS

今月の

これを  
聴かないで  
どうする!!



By 永岡正直 (原稿提供)



NATALIE COLE / TAKE A LOOK ¥1,890

ロングセラーを記録した前作から2年、またハートウォーミングな歌声が帰ってきました。奮ついた心をいやしてくれる18曲。アメリカンスタンダードの良心とも言えるべき一枚。



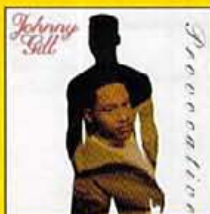
CYNDI LAUPER / HAT FULL OF STARS ¥1,890

アメリカン・ポップスのエッセンスがそのままキャラクターになったようなシンデレイ。あの独特な歌声を久しぶりに聴けるのがウレシイと思うのは僕だけでしょうか?



FISHBONE / GIVE A MONKEY A BRAIN... ¥1,890

クロスオーバー・ミュージックのバイオニア。フィッシュボーンの新作。デビュー当時のスキャットは今は今作では見られない。火照りそうなハードなグルーブが強烈な一枚。



JOHNNY GILL / PROVOCATIVE ¥1,890

ソウル界の若き実力者。ジョニーギルの新作は前作以上にダンスブルな仕上がりが、とは言え、若き日のルーサーを思わせるバラードも健在です。歌声に酔いしれて下さい。

京都店

河原町ビブレ6F Tel. 075-212-7058

OPEN: A.M. 11:00 - P.M. 8:00

大阪店

心齋橋アメリカ村 Tel. 06-211-2997

OPEN: A.M. 11:00 - P.M. 9:00 (土日のみ10:00 OPEN)

TOWER  
RECORDS

L.A. CHICAGO BOSTON NEW YORK LONDON  
SAPPORO SENDAI NIIGATA  
IKEBUKURO SHINJUKU SHIBUYA HACHIOJI  
YOKOHAMA KAWASAKI NAGOYA  
KYOTO OSAKA HIMEJI HIROSHIMA

Pizzicato Five Les Pizzicato Five Le



Pizzicato Five

Les Pizzicato F

Les Pizzicato Five

- 1984年 小西康彌、高浪敬太郎、梶宮諒、佐々木麻美子らで結成。
- 1985年 梶宮諒のプロデュースでデビュー。
- 1988年 佐々木、梶宮脱退。田島真貴(オリジナル・ラブ)がボーカルを担当。
- 1990年 田島脱退。野宮真貴が正式ボーカルとなる。
- 1992年 ニューヨークで行なわれている業界向け「ニューミュージック・セミナー」参加「PSYCO-NITE」出演。
- 1993年 「ボサ・ノヴァ2001」リリース。7月下旬2度目の「ニューミュージック・セミナー」参加及びレコーディングのために渡米。

主なdiscography: 「カップルズ」「ヘリッシマ」「女王陛下のピチカート・ファイヴ」「女性上位時代」「スウィート・ピチカート・ファイヴ」他



野宮真貴



小西康彌

Les Pizzicato Five Les Pizzicato Fre Le